

仰々武州埼玉郡太田の庄須賀の里五百仏山真藏密院縁起をたずぬるに、上古は久米原此里一体を貢馬原と称する牧場なり。其後鎌倉開府に由り奥州街道此里を貫き高野に達す。口碑に云く、久米原辺より権現台の下を過ぎ、往昔慶長中会津征伐の為徳川家康公小山登向の途中此所に於て少々休す。因後人東照権現休息所となりて権現台と云う。高野島玄聖川に至り利根川を渡り高野に入る。当時は高野川と称す。人皇八十六代の御代陸奥の国会津の人伊藤修理太夫光重と云う者在り。鎌倉北条家に仕へ忠勤を擢といえども謗者の為に冤を蒙り、逋て故郷会津に走り旧友草江兵庫の頭貞氏家に匿る。ある人密かに北条家に告ぐ。主君経時益々怒り仁治三年壬寅八月六日、家臣長崎弾正を遣して会津の里に逐しむ。弾正命を御み草江家に到り、力士高工左近をして修理を刺さしむ。而して弾正その首を落し、唐櫃に納れ齎して高野橋を渡り久米原五百仏野（今の境内の古名也）に憩うに少時の後其櫃をあげんと欲するに倏忽として重きこと磐石の如く揺動すること能わず。衆驚愕惶怖して蓋を去つて之を見るに、薬師尊首巍然として在り而して光重の首を見ず。衆惘然たり。弾正即ち状を具して主公に訴う。経時之を訝り別使を会津に遣す。使会津に往きて修理が家に到つて彼れをみるに、常に彼念持する所の薬師如来尊容のみ唯ありて御首を見上らず。修理執権の厳命を蒙り身心危急の時如来修理に代わりて尊首を授く故に修理は恙なく現に家にあり如来の尊容体軀のみを留めて而して尊首を失う。使者之を檢するに果して其の言の如し。直ちに還りて主公に復命す経時神変の偉力を驚歎し尊首を鎌倉に向えんと欲す。然れども猶大磐石の如くして之をあぐることあたわず。時すでに此里の庄官形辺左衛門清宗一宵偉夢を感じ其有縁の地なるを知り官に言して尊首を安置す。四郷宣伝して拝香する者皆須賀川の薬師に参詣すと云う。此れより此の地を称して須賀の里と喚ぶ。其後花園天皇御代正和二年大福長者洪谷丹後入道長有と云う人有り、深く如来の信じ其資材を尽して梵刹を創め五百仏山大福寺と称す尊軀を作りて御首を継ぎ、尊容之に至りて始めて具足円満せり。更に日月両脇侍十二神将を作りて安置す。別に僧坊を建て不動明王を以て本尊となし腹籠に弘法大師御作の不動尊を籠らしめ奉ると云う。是より法燈赫奕男女渴仰して参詣の者常に断たず。靈驗日を遂うて新なり。元享二年伊藤修理の後孫光家奥州に従り鎌倉に至る途次、父祖の口碑を憶い此尊を拝せんと欲し而

して此地を過ぐ。時に日全く暮れ、四方暗黒野武士の侵掠する所となり身命殆ど危し。忽ちに十二個の勇士有り馳せ来りて光家を救い伴うて其邸に宿せしむ。翌朝覚れば薬師堂廊に在り光家大に驚き起ちて本尊及十二神将を拝するに、神将の容貌昨宵の十二士に髣髴たり。因つて悟し本尊の靈験を感じ信心肝に銘じ長有阿闍梨を排して悌染し有俊と号す。嘉暦二年長有阿闍梨の円寂に及び遺囑を受けて第二世となると云う。其後数多の年所を歴て寛永二年俊雅法印中興し寺号を医王山真藏院と改む。田宮庄国府間正福密寺の会下となる。元禄中法印俊栄法流開山となり、新義真言宗一色末に晋む三十二代寛瑜法印仁和門跡に仕へ深く愛眷を蒙る。文政中師跡を紹ぎ、関東に下向するに及び、菊御紋章紫縮緬幕を賜はり院家号を許せらる。三十四世長善の時維新毀釈の厄に遇い衰頹す。三十六世元光僧都の時明治三十八年祝融の災に遇い、薬師堂及薬師尊脇侍神将を挙げて悉く烏有に帰す。同三十九年今の堂を再建し、今の尊を作ると雖も旧觀其一たりとも復せず。嗚呼惜しいかな因に云う。幕時会津侯参觀毎に杉戸宿より使を差し代香せしめ、青銅一貫文を宝前に献ずるを以て例となし維新の際に至れり。